

美術の窓(84)

サン・サヴァン教会堂のロマネスク壁画と日本美術

—故吉川逸治前館長を悼む—

大和文華館館長 水田 徹

当館の吉川逸治前館長が昨年末に94歳で亡くなられました。

恩師であり、ギリシャ美術をテーマに美術史を本格的に学ぶよう勧めて下さったのも吉川先生ですから、雪の鎌倉での葬儀のあと、私はしばらく何も手に付きませんでした。そんななか、さすがのように繕いたのが先生の名著『サン・サヴァン教会堂のロマネスク壁画』(新潮社、82年刊)です。美術作品を自分の眼で直に、かつ総括的に見ることに、という美術史学に対する先生の基本姿勢を改めて目の当たりにし、身の引き締まる思いがしました。

昭和の初め、先生が若くしてパリ大学に留学され、詩人美術史家として名高いアンリ・フォション教授の指導のもと、サン・サヴァンの壁画を博士論文のテーマに選ばれたまでの経緯は、本誌66、67号(84年刊)に先生ご自身が詳しく述べておられます。

さらに前掲のご著書の序文で、壁画の調査に着手するにあたって、東京大学の美術史研究室で法隆寺壁画の様式と後補の有無について先輩たちと議論し合ったこと、また松本栄一博士より敦煌画を題材にモレリ流様式分類の手法を教わったことが非常に役に立った、と

述懐されています。同書本論で、膨大な壁画群の作者の手を後補の跡も見定めつつ、〈身廊第一の画家〉〈第二の画家〉…と見分けられていくさまは正に先生の真骨頂、推理小説を読むかのような迫力と想像力にあふれています。

「総括的に見る」という吉川先生のもう一つの哲学は、一字の教会堂全体を調査するという経験を若くして積まれたことに発していると思われまふ。その調査内容そのものについても、先生はその概略を本誌68、69号(84年)に記されておられますが、私がとりわけ強く打たれるのは「全体を視野に入れて」という先生のスタンスの取り方です。サン・サヴァン教会堂のロマネスク壁画は玄関廊、階上廊、身廊、地下祭室の壁ないし天井画に四大別されますが、先生の視線と思考は常にこの四者間を駆けめぐり、あるいは向かい合う壁同士、また上段と下段の壁を対比させ、サン・サヴァン教会堂の全体像に迫ります。そして遂に本誌68号に見られるように、サン・サヴァン玄関廊の〈女と龍〉(挿図)における聖母を中心に据えた構図をゴシック絵画の前兆と捉え、さらに69号ではロマネスク美術と当館所蔵の国宝<松浦屏風>の近似性に

も着目されます。

大きく、かつ世界的視野で日本美術を見るという先生の姿勢は、大和文華館の運営にも強く反映されました。特別展の設定法がそのひとつです。美術館の特別展は学芸員の日頃の研鑽を披露する場ですから、そのテーマは担当者の専門性に強く左右されます。そんななか前館長は、東洋・日本美術を専門とする当館の特性を活かしつつ、例えば松浦屏風—江戸寛永期の女性美>の次ぎに<太田記念館浮世絵名品展>を配して美術の展開を大きく捉え、<百済・新羅の金銅仏>の後にそれと不可分の<ガンダーラの彫刻>を開催されるという具合です。ご逝去にあたり内閣よりあらためて勲二等に叙せられたのも、決して故なしとしません。

こうした先生のアート史観は、本誌(大和文華館友の会季刊会報)に70回に亘り連載された随想<美術の窓>にも端的に現れています。中でも圧巻のひとつは第80号(87年秋)の<北斎の「人間世界」>と題された葛飾北斎論です。少し長くなりますが最後にその数節を再録し、吉川逸治前館長追悼の辞と致します。

…すでに半世紀あまり経ったが、パリ遊学中、わが師アンリ・フォション先生は、幾度か強い語調で、北斎の「人間世界」といわれて、北斎の芸術を激賞された。(中略)先生は「48年の人間」とか、「ドミエの人類」、「ゾラの人類」、あるいは「バルザックの世界」という言葉を用いて、力強く社会に生き、独創的な見識で自分の生き

る人間社会に広く自分を投射しながら、創作活動のうちに多種多様に身近な人間社会を拡大し、自分の芸術的人間世界を作り上げる、自分の「人類」を創造する芸術家を好んで語り、また芸術家のこのような人類創造の側面を浮彫りにして、講義され、談話されるのを好まれた。(中略)師が北斎について激賞される折は、単に版画の世界の大家として語るのではなく、19世紀世界の社会的、歴史的展望のうちに北斎を位置づけ、北斎の版画を根底において終始支持してきたものが、真実の観察に基づいた批判的精神であり、それが彼の身近な人間社会と密着しているところに、19世紀フランスの画家たちと通ずるところのあることを洞察されて居られたと思う。(中略)

北斎は末世に生き、溺れず、阿ねず、道にかなわぬ愛欲は畜生道に墮ちることを図示、享楽がさめれば相手は大ゴロ、後代の西欧作者の小説に朝起きたら昆虫になっていたというのを思わせる。

北斎は好んで恐ろしいお化け、白骨人物を描く。その想像力はすざましい。西新井大師の大作、弘法大師病魔退治の図(挿図)もまさにこれら一連の怪奇世界の傑作。北斎はここで天の理、人情、義理などを超絶した世界にいて、人類の高慢を警告する。経巻を両手にしかと握って念ずる弘法大師は、異様な姿の疫病の赤鬼の恫喝に耐えこらえる。恐ろしい狼犬も老樹に頼って咆哮するのみ。法が耐ゆるか、悪道が横行するか。北斎の「人類」はいかに。

サン・サヴァン教会堂壁画<女と龍>



北斎画 弘法大師病魔退治図

